

序

この特集は、一橋大学東アフリカ学術調査団の三年次にわたる現地調査の成果の一部を表題のテーマで報告するもので、個別社会の記述的要約を目的とし、本格的な比較研究は今後の課題として残されている。

我々の調査団は昭和五〇年に組織され、文部省科学研究費補助金（海外調査）の交付を受けて五二年度、五四年度、五六年度の三年次にわたって現地調査を行った。課題名は「環ヴィクトリア湖地域のエスノヒストリー手法による総合社会調査」で、調査地域は当初の計画ではウガンダを中心にケニア・タンザニア・ルアンダ・ブルンジの五カ国にわたるものだったが、各地の政情不安等の理由により結局三年次ともケニアを中心とすることとなり、ウガンダとブルンジは短期の視察に終わった。

長 島 信 弘

第一次調査では和崎洋一天理大教授（現富山大教授）がタンザニアで調査を行ったが、第二次、第三次は交代した小馬徹がケニアで調査を行った。

調査者と、ケニアにおける調査対象民族は次のとおりである。

長島信弘 テソ（バラllナイル語系）

阿部年晴 ルオ（ナイル語系）

小林伸浩 イスハ（バントゥ語系）

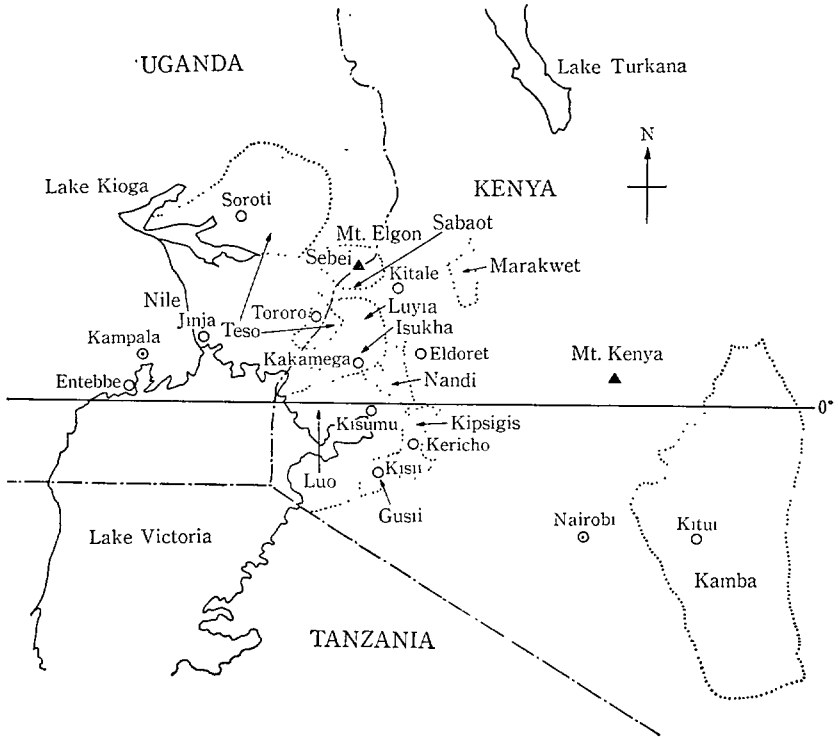
松園万亀雄 グシイ（バントゥ語系）

上田将 カンバ（バントゥ語系）

小馬徹 キアシギス（カレンジン語系）

調査の目的は、基本的には個別民族誌の作成だが、全体としては、言語・文化・歴史を異にする諸民族が長期

Map I Reserch Areas and the Ethnic Groups



にわたって接触交流してきた西ケニアで、各民族の固有文化がどのように持続し、また相互影響や外来文化・国家的諸制度の浸透によってどのように変化しているか、という文化動態を明らかにすることにあった。上田の調査したカンバ族は他の五民族から地理的に隔たった中央ケニアに住んでいるので、上田による調査資料は他の五人による西ケニア調査資料の対照資料としての役割を果たすことになる。

調査の成果は各研究者がすでに論文形式でいろいろなテーマについて発表しており、また調査団全体としてはケニア政府への中間報告と、文部省科学研究費補助金によって一橋大学名で出版した英文報告がある。今回の特集では、災因論の比較研究という長期的目標の第一段階として、各社会における死霊と邪術に関する解釈と行動の体系を概観することにした。

「災因論」という語はたぶん私が最初に用いたものだが（長島、一九八二）、考え方はエヴァンズプリチャードに依っている。彼は『ヌーア族の宗教』の中で、宗教と呪術の区分にこだわる「原始宗教」に関する諸理論の欠点を指摘し、必要なのは個別民族の「哲学」の体系

的研究であると主張した。

「アフリカのすべての民族において、有神の信仰、マニズム信仰、妖術の諸観念、超自然的制裁を伴う禁忌、呪術行為などの諸観念が独自の結びつき方をしているがゆえに、各民族の哲学は独特な性格を示している。……（そうした諸観念の中で）何が支配的モチーフであるかは、ふつう……危険や病気やその他の不幸に際して人びとがそれらの原因を何に求め、それから逃れたりそれらを排除したりするためにいかなる手段をとっているかを調べることによってわかる。」（前掲書、四九四―五）。

このエヴァンズプリチャードの叙述の前段にある「哲学」を我々は「コスモロジー」と言い替え、後段の「不幸の原因の追及とそれに対処する手段」を「災因論」とよぶことにする。

災因論は、個人による個別的解釈と行動を規定する、個人に外在する集合表象としての文化システムとして考える。我々が調査した諸民族もまたそれぞれ複雑な災因論のシステムをもっており、相互に交流のある隣接社会でも、その内容は共通要素よりも独自性の方が著しいことはこの特集に収められた各論文を対照していただければ

ばおわかりになると思う。この点で我々は一つの問題に遭遇した。個別民族の災因論の中の一つの災因について、その観念と行動を詳述しようとするればそれだけで長い論文になってしまうし、いわんや災因論全体を一つのシステムとして描くには一冊の民族誌を必要とするからである。それにもかかわらず、限られた紙面の中で死霊と邪術という二つの災因をテーマとしたのは、複数の災因がどのように相互排他的に、あるいは相互補完的に、関係しているかを明らかにすることが災因論研究にとって不可欠であると考えたからである。

ここで「死霊」と「邪術」という語について簡単に解説しておかねばならない。この二語を我々は厳密な定義で規定した術語としてではなく、多様な観念や行動を各研究者が任意に包括できるような「見出し語」として用いている。

「死霊」とは、死後に存在する靈魂という観念がある場合に、「祖先」としてはっきりと祀られる霊以外のものを広く指している。それ以上の区分は、各民族によっていろいろなされているが、それらを比較のために分類することは避けることにする。

「邪術」については、人類学史にかかわる解説を必要とする。エヴァンズ・ブリチャードがアザンデ研究で加害者が意識せずに行う「妖術」witchcraftと、意図的に行う「邪術」sorceryを区別 (Evans-Pritchard, 1937) したため、その後のこのテーマに関する諸研究では用語の混乱が起っている。何故なら、この二つの概念を明確に区別していない社会が多いからである。この論集でも、「邪術」と「妖術」という二語が用いられているのは、こうした事情を反映したものである。

表題を「邪術」としたのは、意図的に行う神秘的攻撃に重点を置いたためだが、個人的見解を述べれば、妖術と邪術の総称として「ウィッチクラフト」という語を用いるのが見出し語としてはより一般性をもつと考えている。ここで、死霊とか邪術というのは非科学的な迷信に過ぎないから、そのようなものを研究対象とするのは猟奇的好奇心にすぎないとお考えになるかもしれない一般読者に対して、このテーマの意義について多少の説明をしておこう。

ほとんどのケニア人にとって、死霊や邪術の存在は、神の存在同様確固たる現実であり、また日常生活と深く

かかわっている。我々人間社会の研究者が対象とするのは、自然科学的真偽ではなく、こうした「社会的事実」なのである。神を恐れることの方が死霊を恐れることよりも高級であり、正常であるという考え方は文化的偏見に過ぎない。

社会学的に言えば、道徳性(観念的正当性)がどのような形式で介在しているかの違いに過ぎない。災厄に見舞れたのは、本人の反道徳的言動の罰としてそうなったのか、それとも本人には罪がなく、災いをもたらした側に悪意があったのかの違いといひ替えてよい。グラックマンはエヴァンズ・プリチャードに依拠しながら、この問題を「責任の配分」という概念で整理した(Gluckman, 1972)。災いの責任を誰に(何に)求めるかは「災因論」の根幹をなすイデオロギーであり、その社会的、政治的、法的意味は重要な研究テーマとなりうるものである。なぜなら、道徳性、非道徳性、反道徳性をいかに判断するかは、状況によって、また当事者の立場によって、相対化され、操作される可能性を常にもつからである。そこにコスモロジーの構成要素としての災因論と、現実に演じられる社会劇との結節点がある。

ここに集められた六編の論文を概観すれば、同じ「死霊にたたられた」、あるいは「邪術をかけられた」という解釈でも、責任論の観点からすると、いろいろな違いがあることがわかる。被害者無責任論と、有責任論の間にさまざまな微妙な変異があり、それが死霊や邪術の安易な比較研究による一般化を拒否しているのである。

参考文献

- Douglas, M. (ed). 1970. *Witchcraft, Confession and Accusations*. Tavistock Publications, London.
- Evans-Pritchard, E. E. 1937. *Witchcraft, Oracles and Magic among the Azande*. Oxford, at the Clarendon Press.
- 1956. *New Religion*. Oxford, at the Clarendon Press.
- (邦訳) エヴァンズ・プリチャード、向井元子訳、一九八二『クトゥー族の宗教』岩波書店。
- Gluckman, M. 1972. 'Moral Crisis: magical and secular solutions' in *Allocation of Responsibility*, edited by M. Gluckman, Manchester University Press.
- Lewis, I. M. 1971. *Ecstatic Religion, a Pelican Original*, Penguin Books.
- Mutungi, O. K. 1977. *The Legal Aspect of Witchcraft in East Africa*. East African Literature Bureau, Nairobi.
- Nagashima, N., T. Abe, M. Matuzono and N. Nakabayashi, 1979. *A Comparative Study of Belief Systems in Western*

Kenya, An Interim Report Submitted to the Kenyan Government, (manuscripts.)

Nagashima, N. (ed.), 1981, *Themes in Socio-Cultural Ideas and Behaviour among the Six Ethnic Groups of Kenya.*

Hitoashashi University (非売品、文部省科学研究費補助金(144))。

長島信弘、一九八二、「解説」『ヌアー族の宗教』岩波書店。

(一橋大学教授)